



“違惑星にて”

7歳児 ロシア

幼年美術

606

2019 12月号

発行所 大阪府東大阪市長田中4丁目6-3

ぺんてる(株)大阪支社内

全国幼年美術の会 〒577-0013 ☎(06)6747-1601

発行人 木代喜司

年間購読料 3,000円 1部300円(送料込み)



第49回 世界児童画展 作品より



“こびとのくつやさん”

5歳児 兵庫県



“でっかいおいも”

6歳児 福島県

地球温暖化などの気候変動は秋の紅葉にも影響を及ぼしています。新元号がスタートして6ヶ月「令和」の意味は「厳しい寒さの後に見事に咲き誇る梅のように、ひとり一人の日本人が明日への希望と共にそれぞれの日本人が希望と共にそれぞれの花を大きく咲かせることができる。」と期待されています。

四季の移り変わりを愛しむ気持ち薄らぐのは寂しいと思いませんか？ 私たち表現活動の研究に携わる者として考えてまいります。

今年の世界児童画展も既に審査が進んでいるようです。美文化協会の募集要項によると大阪万博を機にスタートし、今年は半世紀を迎えるとのこと。子ども達の感性と理性の調和のとれた成長をねがうと共に、国を超えて世界の人々をつなぐ国際相互理解です。

私の住む三重県でも、年間カリキュラムに入れて取り組む園も多くみられ、園児たちは勿論、結果は保護者達の楽しみとなっています。この機関誌にもその作品の一部が掲載されますが、選ばれた絵は年齢に見合った素直な子どもらしいのが特徴です。作品の出来、不出来でなく、「幼児の絵は生活の記録」なのです。一番気を付けなければならないのは大人の悪い干渉や概念指導で、子ども自身の創意や生命力を枯渇させてはいないかと確認してほしいと願うものです。

全国幼年美術の会 常任委員 谷岡経津子

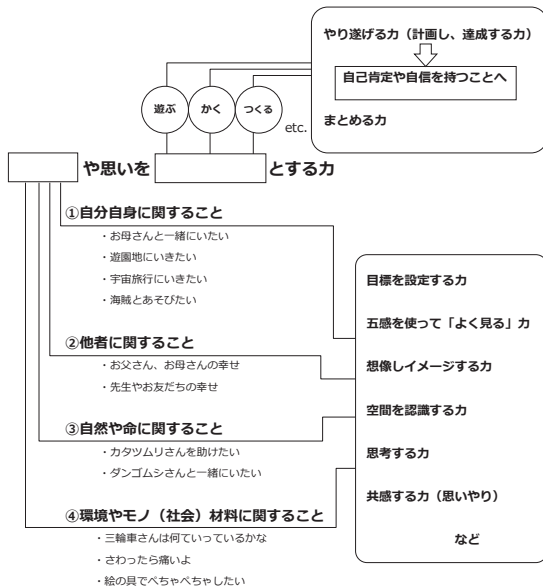
巻頭言

「幼児の絵は生活の記録」
—世界児童画展に参加を—

第56回 全国幼年美術の会 夏季大学
やさしさで考える造形教育—子どもが夢を叶える場所—

岡山大学大学院教育学研究科 教授 清田 哲男

1 造形で育てほしい力



1



やさしさの造形教育のポイント ①

言葉を話さない道具たちの言葉に耳をかたむける

どんな子どもたちに育つでしょうか

3

講演

演題

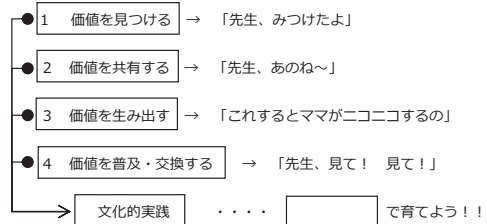
やさしさで考える造形教育
～子どもが夢を叶える場所～

岡山大学大学院 教育学研究科 教授

清田 哲男 先生

夏季大学での講演〈清田哲男先生〉については、講演レジメを、次号と2回に分けて掲載し、その内容をお伝えいたします。しっかり筋道を組みたててお話をいただいたので、記載いただいたキーワードをしっかり押さえて、読み解いてみてください。

2 価値と想像力



() ではなく () について考える

3 『やさしさ』とは

やさしい → すべての人の を大切にできる

やさしい 道具 環境・情報・モノ・コト →

いい道具というのは、
むこうから『 』 → アフォーダンス
という働きかけをしています

(佐藤雅彦さん)

身の回りの道具はあなたに「どう使ってください。」と言っているのでしょうか。

2

第56回 全国幼年美術の会 夏季大学

実技研修

実技研修E 【滋賀幼年美術の会】

なかよしのかたちみつけ(土ねんど
くわたとねんどがなかよくなる活動)

指導担当・黄瀬 重義

土ねんどに触れる、そして手のひらに乗せてみる、その重さとひやりとした冷たさを感じる、ぎゅっと握る、形が変わる・・・つぎつぎと自然に活動が生まれます。特別な道具がいるわけではありません。特別な技術もありません。

太古の昔からずっと土ねんどは人間の生活に寄り添ってきたのではないのでしょうか。裸足で走って、土の上に寝転がっていた心地よさの記憶は今の人間にも引き継がれています。何かを作るとか、表すとか目的を見つける前に土ねんどと子どもとの対話が始まります。土ねんどは子どものやりたいことをちゃんと聞いてくれます。けれども、子どものいいなりになるわけではありません。放っておいても大事に握っていても乾いてしまいます。高くつむと崩れます。時間とともに固くなります。聞いてくれるけれどもいいなりにならない土、子どもと土との対話とはそういうことです。

そういう感覚を指導者にも思い出してもらうために、毎年土ねんどの活動を全国幼美のこの場で行っています。

今年も1時間ノンストップで参加者のみなさんが土ねんどに向き合いました。

本来、子どもは裸足が大好きだし、土や水に触れるのも大好きなはずですが、参加者のみなさんにも、土ねんどを素足で踏んでもらいました。手のひらだけでなく足の裏からつたわる土ねんどの心地よさに浸っていると自然と体の緊張がほぐれ笑顔があらわれてきました。



実技研修H 【四国幼年美術の会】

自然の素材 竹の音で楽しむ
く竹を吹く 打ち鳴らす

指導担当・篠原 五良

日本人に昔から使われている「竹」。竹を使って音の出るものを制作した。

草遊びの「ストロー笛」、水を使った「水笛」、矢竹で作る「ウグイス笛」、孟宗竹で出来た「竹ボラ」を制作。音を出して遊ぶことの楽しさを各自が体験した。

「ストロー笛」、「水笛」は予定の時間より全員が早く音を出すことが出来ました。

「ウグイス笛」は、音が出る位置を見つけるのに苦労しながら瞬間接着剤で吹き竹を固定、野鳥の鳴き声を工夫しながら再現していました。

休憩時間をはさんで「竹ボラ」を吹いたり、竹の棒で叩いてドラムにしたり、各グループで演奏が始まりました。さながら戦国時代の戦いの始まりを告げる活力ある研修になりました。最後に、竹ボラの活用について参加者から沢山のアイデアが出ました。(サークルの目覚まし時計、花生け、太鼓や鼓、ランプシェードなど) 作品の活用方法へ理解も深まりました。

音の出る素材から、鳥の鳴き声の多様性や生息に興味を持った人も多くいました。竹ボラ演奏からは、材料集めのポイントや苦勞、教材研究の重要性を学ぶことが出来ました。参加者28名の笑顔が、印象的な実技研修になりました。



実技研修I 【中国幼年美術の会】

いろいろな絵の具遊び
くシテ・パス・クレヨンも用いながら

指導担当・松尾 彩加

描画技法の一つに「モダンテクニク」があります。小学校・中学校の図画工作・美術科でも学ぶ技法です。偶然にできる色や形・模様を利用した表現技法なので、思ってもみなかった変化や結果が起こり、表現活動への興味関心が高められると期待できます。また、何かの形を描くことに苦手意識を持っている子どもも「ふしぎだな。おもしろいな。楽しいな。自分にもできたよ。」という満足感を味わうことができます。だからこそ、幼児期の子ども達に体

験させたい活動だと考えます。数多くの技法がある中から、今回は、8種類を紹介しました。

幼児・児童の作品を鑑賞

年少から小学校6年生までのモダンテクニックを使った描画作品を映像で紹介しました。どのような場面で活用するのか、それがどんな効果を生んでいるのかを具体的に知ることと「技法を作品に生かす」という実践につなげてもらいたいと思います。

モダンテクニック

①白のクレヨンとコンテ

白画用紙へ白クレヨンで絵を描く。2色のコンテを持ち、金網の上でこすって用紙全面へ粉を落とす。全員用紙を持って左右にゆらゆらした後、粉を容器へ移す。白クレヨンに粉がつき、見えにくかった絵がカラーで現れる。(歓声！)

②コンテのぼかし(①に続けて)

容器の粉をパフにつけて白画用紙の部分にこすって色をつけると淡いぼかしになる。(面ぬり・加筆)

③ペロペロキャンディー「パチック」

クレヨンで中心から外へ向けて渦巻きを描く。3〜5分間、一本線でできるだけ間隔を狭く描き続ける。(集中力も高まる。)綿棒の先に絵の具をつけて渦巻きの中心へ

おく。筆に水を多めに含ませて塗り広げる。クレヨンははじいての色合いを楽しむ。

④泡クブク

ストローの先にスチールウールを薄く巻いて輪ゴムでとめる。台所洗剤と水を1対1で液を作り、浅く小さめの容器へ液と絵の具を入れる。画用紙の上に置いてストローでクブク吹くと色つき泡がモコモコ。(歓声)泡が消えるまで置くと泡の後が模様となる。上部の泡を用紙の上へ「泡の引越」をさせるとよい。

⑤マーブリング

バットへ水をはり、2センチ角の広告を4枚浮かべて彩液四色をのせ、竹串で水面を静かに混ぜてできる模様を紙に染め取る。空気が入らないように水面に用紙をおく。めくって見た瞬間、その模様に歓声！(広告は端に寄せる。)

⑥にじみ

筆に水や色水を含ませて画用紙全面を濡らし、乾かないうちに他の色をたらしてにじませる。さらに他の色をたらすと紙面上で色が混ざり合って新たな色や模様がで

⑦スポンジ(水で濡らしぎゅっと絞って使う)

・3センチ立方体のスポンジに輪ゴム2本をたすの字にかける。パレ

ットへ赤と青の絵の具を出してスタンピングを何度もすると重なった所が紫色になりアジサイになる。・薄いスポンジの端へチューブから直接3色位並べて出す。スポンジでカーブを描くと一度に虹ができる。

⑧塗り広げ

両手のひらを水で濡らし、茶と黒の絵の具を出して両手へしっかり色をつける。画用紙の下から上に向けてぎゅうっと塗り広げる。力強く太い幹ができる。指先へ赤白(緑黄)をつけてポンポンすると桜の花や青葉など季節ごとの木が表現できる。

どの技法にも受講者の「わあ!」という歓声が上がりました。子ども達にもこの驚きを体験させたいという声を頂きました。



あとかぎ



子どもたち、いつの時代においても、私たちの希望です。かつては、私たちも、今の子どもたちと同じように輝いていたはず。この本が、私たちに、美しい未来を創る子どもたちに寄り添い歩むことの大切さを思い起こさせ、笑顔あふれる家庭や教育の世界の実現に向けた一助となれば幸いです。」と述べておられます。

でご購入の方もいらっしゃると思います。元文部科学省事務次官で、現在国立東京博物館館長で、同協会理事長である銭谷正巳氏は、「子どもたちは、いつの時代においても、私たちの希望です。かつては、私たちも、今の子どもたちと同じように輝いていたはず。この本が、私たちに、美しい未来を創る子どもたちに寄り添い歩むことの大切さを思い起こさせ、笑顔あふれる家庭や教育の世界の実現に向けた一助となれば幸いです。」と述べておられます。

本会副会長の大橋功先生は「絵を通して知る子どもの真実」子どもは世界をどのように捉え、どのように表すのか」と題され、子どものつくり出す作品にばかり目を向けてしまいがちである私たちの姿への警鐘と、子どもの表情・動作の向こうにある「こと」への視点の大切さを述べてくださっています。幼美が長年大切にしてきた、子どもの絵を読むとは、正にそこへの視点への誘いとしての活動であったこと、不肖私も、「子どもの絵を通して学ぶ」と題して、幼美での学びの尊さを書かせていただいています。最後の最後に宣伝がましいことをお許しください。

(編集担当 羽溪)